

## 高校生へ 私が選んだ 1冊の本

### 物理学者、ゴミと闘う

広瀬立成：著  
(講談社現代新書)

「温暖化」「砂漠化」など様々な環境問題を日常よく目にする。私はこのようなことをどこか心の奥底で「自分には関係ない。悪いのは開発を進める大人達なのだ。だから、私には無縁なことである…」と勘違いしていた。しかし、この本を読んで私は知ってしまった。「ゴミ」というものが環境を大きく左右するということ。この事実を知ってしまった以上、私は「環境問題」が人ごとなどではないということに気づいた。

具体的に言うと、私がまず驚いたのは、日本人は1年間に4,153万トンものゴミを出して、1人あたりでは398キログラムものゴミを出しているということだ。これは、標準的な乗用車1台分の重量1.5トンに相当するゴミを1家族4人で年間に捨てているということになり、日本全体では、毎年3,000万台分以上のゴミが捨てられていることになる。しかも、ゴミの比重は自動車よりも軽いため、ゴミの体積はさらに数倍となるのだ。また、「生ゴミ」というのは燃やせば、ダイオキシン発生などの原因となるが、堆肥化すれば、資源になる。よって生ゴミを捨てるということはお金を捨てているようなものだという事を知ったし、日本は「レジ袋」を1年間で300億枚、1人あたりでは300枚を使用していて、材料として使われる原油と製造工程で炭酸ガスとなる原油などを合わせると、6億リットルにも及ぶ原油が日本で使われているということを知った。

日本の高度経済成長時代に唱えられていた「戦略10訓」というものには絶句した。

「どんどん作れ、どんどん買わせろ、どんどん捨てさせろ——」

という恐ろしい考えが当時流行の先端であると思われるなどということは、大量消費をしている現在ですら、想像できない。だから「捨てることは美徳である」という考えを戦前の日本人の考えへと戻すきっかけを与えたワンガリー・マータイさんはとても偉大であると思う。

ケニア人であるマータイさんが自国で進めている「3つのR」というキャンペーンの「3R」というのは、日本語で言うと「減量・再使用・再利用」を意味するものである。

2004年にノーベル平和賞を受賞したマータイさんは、記念講演「環境と平和」で「3R」はこれからの地球環境改善の要となるものだと発表した。そして、この「3R」の概念のもとは今日本人が忘れかけている、「もったいない」という言葉なのである。マータイさんはこの言葉を、これからの世界のためにも広めていきたいと言うのだ。

「もったいない」というこの何気ない言葉、ある一面から見ると「貧乏そう」というように、あまり良いイメージではないが、環境という一面から見ると、これからの世界を救う魔法のような言葉なのだ。

今までの私は、「ご飯を食べても嫌いなものは食べない」「ノートやルーズリーフは、まだ使えるところがあっても捨てる」など、今となって考えてみると「もったいない」ことばかりをしていた。筆者のいうように、ゴミが出つづけるから、大量のガスを排出する大型焼却炉が建設される。それなら「もったいない」という精神を持ち、無駄遣いをせずに、ゴミを減らす。これが私達が簡単にできる環境破壊の進行を遅らせる方法なのではないだろうかと思ふ。

(青森県立青森高等学校 1年 葛西 莉央)